

大学入学共通テストおよび国公立大二次・私大

# 大学入試

分析と対策

2023  
令和5年度

# 英語

学校法人 河合塾  
英語科講師 江本 祐一

林啓館

この冊子の内容は次の URL からアクセスできます  
<https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/kou/english2022/support/>

## (1) 概要

共通テスト3年目の2023年度の第1日程（以下すべて第1日程についての記述）は、基本的に2022年度同様の出題であった。リーディングでは「さまざまなテキストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問うことを狙いとする」、リスニングでは「生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問う」という出題方針に従った出題であった。リーディングでは第5問に物語文が出題されたことが大きな特徴であった。また、新傾向の問題として第3問Aでイラストを解答として選ぶ問題が出題された。リスニングでは第3問以降は読み上げ回数が1回（100点中59点）の問題が出題された。選択肢等を含めたリーディングの語数は6,116語で、2022年度の6,044語から微増している。リスニングの読み上げ語数は1,517語で、これは2022年度の1,532語から微減しており、設問などの読むべき語数は564語で、これは2022年度の562語とほぼ同じであった。マーク数は、リーディングでは第6問Bで1つ増えたことにより2022年度より1つ増えて49（22年度には第6問Aで1つ増加）に、リスニングは2022年度と同様に37であった。リスニングの第4問Aでは、2022年度の出来事を時系列に並べる問題（施行調査テストで出題されていた）から、2021年度と同様のグラフの完成問題にもどった。リーディング、リスニングとも難易度は2022年度とほぼ同じであったが、大学入試センター発表の平均点は、リーディングは53.81点で2022年度の61.80点から7.99点下がり、リスニングは62.35点で2022年度の59.45点から2.9点上がっている。リーディング、リスニングともアメリカ英語だけでなくイギリス英語も出題されている。また、本文の表現、放送された表現を言い換えた選択肢が正解になる問題、複数箇所から集めた情報を元に正解を選ぶ問題が出題された点もこれまでと同様であった。個別の問題についての考察で見ると、このような問題の正答率は低い。なお、河合塾の再現データ分析（以下、正答率については河合塾の再現データ分析の資料による）では、2022年度はリーディング・リスニングともに現役生と高卒生の間で10%以上の正答率の差が生じた問題はなかったが、2023年度は、リーディングでは18問、リスニングでは10問について、10%以上の差がついている（いずれも

高卒生のほうが高かった）。

## (2) 筆記試験

## 第1問

A：チラシ B：ウェブサイト

Aは2022年度の料理本からの出題から、チラシの読み取り問題に変わった。Bは夏の英語特訓キャンプに関するウェブサイトの情報の読み取り問題。問1、問2は複数箇所から集めた情報をもとに判断する問題。

## 第2問

A：広告 B：学校新聞

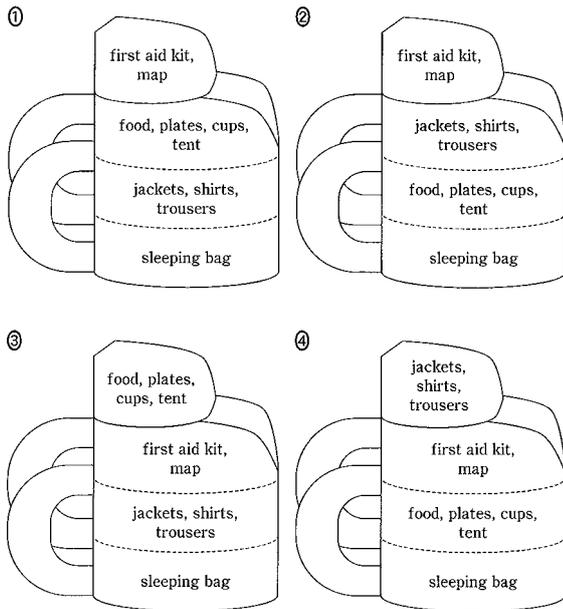
Aは靴の広告（使用者のコメントつき）を読み設問に答える問題。Bは通学時間の使い方に関する調査レポートからの出題。2022年度は「事実」を求める問題が出題されたのに対して、Aでは「意見」、Bでは「事実」を問う問題が出題された。Aでは指示文の読み取りが前提とされる問題（問7）、Bでは計算が必要な問題（問2）、複数の情報を確認する問題（問3）が出題されたが、正答率の低かったのはBの問4。これは各選択肢の正誤を1つずつ確認する普通の内容一致問題であるが、該当箇所の英文に *should have done* 「…すべきだったのに」という表現が用いられ、正解の選択肢は *could have done* という仮定法過去完了の表現が用いられており、過去の事実と反する仮定が述べられている、ということがわからず、正答率が下がったのではないかと思われる。全体の正答率は3割強で、高卒生でも4割程度の正答率であった。誤答で最も多かったのが④で、これは本文に書かれていない事柄であるが、「楽しむためにビデオを見ることで時間が早く過ぎた」という内容は、本文の読み取りが甘かった受験生には正解に見えたようだ。

## 第3問

A：ニュースレター B：ブログ

Aは大学のキャンピングクラブのニュースレターからの出題。次に挙げているのは、問1の問題。単にリュックサックに詰め込むものの順番を答えさせるものであるが、解答の選択肢がイラストで与えられていた点が目新しい。

問 1 If you take Kaitlyn's advice, how should you fill your backpack? 16



### 2023年度大学入学共通テスト 英語 リーディング 第3問

Bは文化祭でのクラブの出し物の参考になるブログからの出題。2022年度同様に出来事を時系列で並べる問題が出題された。

#### 第4問 記事

2022年度同様に2つの英文の読み取りの問題。効果的な学習方法に関する記事を読み、それぞれの記事の筆者の考え、1つめの記事で紹介された学習法の問題点、2つの記事の筆者の意見の一致している点などが問われている。問5は記事の後に追加すべき内容を推測する問題が出題されているが、正答率は8割を超えていた。

#### 第5問 物語文

2022年度は施行調査テストと同様の伝記が出題されたが、2023年度は物語文が出題された。2022年度同様に、出来事を時系列に並べる問題（問3）のほか、センター試験の頃に出題のあった、本文に直接述べられていない事柄の読み取り問題（問5で「本文から読み取れる2つの教訓を問うもの」）も出題されている。①、⑤が正解であるが、①の正答率は8割近いのに対して、⑤は5割程度の正答率であった。

#### 第6問

A：記事 B：論説文

Aは人が物を収集したがる理由に関する記事を読み、ディスカッションのための要約メモを完成させる問題で、4つの設問に答える。ペア採点となる問3（41）、問4（42）は3割程度の正答率。正解は④と⑥で、単独で見てもいずれも4割程度の正答率であった。同様の傾向はクマムシの生態を扱ったBにも言え、ペア採点の問

2（45、46）の正答率は2割程度（単独では正解の①は4割、⑤は5割程度の正答率）。また、Bの問1は全体の正答率が3割にも満たず、Bの問5は2割にも満たない。今回のリーディングテストで平均点が大きく下がった原因はこの第6問の正答率が低かったことが最大の原因であろう。Bは本文の順とスライドの順が異なっていたことも、受験生が戸惑う原因となったかもしれない。Bの問1は本文に書かれていない事柄を選択する問題。当然ながら、本文の表現を言い換えたものが選択肢の表現になっている。Bの問5は「クマムシを宇宙に送ることについて推測できることは何か」という設問で、第4問の問5、第5問Bの問5と同様に、本文に直接書かれていない事柄を推測する問題であるが、この問題の正答率が格段に低かった。

☆☆☆☆☆

総語数が6,000語を超え、さまざまな部分から情報を集めて正解を導き出さなければならない出題が含まれるために、速読力が必要とも言えるかもしれないが、内容理解を伴わない速読力には意味がないことは言うまでもない。まずは、文法的理解に基づいた正確な読解力を養い、語彙力を高めていくことで、自然に英文が正確に早く読めるようになる、という状態を目指すべきである。2023年度の問題では、仮定法過去完了の知識がなければ解答できない第2問Bの問4の正答率が低かったことから、正確な文法の知識が不足気味であることがうかがえる。また、受験生になじみのない単語が含まれることが増えているが、全体の内容がわかれば問題にならない程度のものである。普段から、少しくらいならわからない単語があっても全体を読み切るようにトレーニングすることが必要であろう。

### (3) リスニング試験

#### 第1問

A：短文の内容一致 B：短文のイラスト選択

例年通り、Aでは短い発話を聞きその内容と合っている選択肢を選ぶ問題が4問出題されている。Bでは短い発話を聞きその内容と合っているイラストを選ぶ問題が3問出題されている。第1問は音声は2回流される。全体の正答率は8割を超えており、特に正答率の低い問題はなかった。

#### 第2問 対話文に一致するイラスト選択

短い対話文とそれに関する問いを聞き取り、その答えとして適切なイラストを選ぶ問題が4問出題されている。音声は2回流される。第2問全体の正答率は7割を超え

ていた。

### 第3問 対話文の内容一致

短い対話文を聞き取り、一致する選択肢を選ぶ問題が6問出題されている。第3問以降は音声は流されるのは1回のみ。全体の正答率は6割を超えるが、問15の正答率は4割程度だった。

### 第4問

A：グラフの完成問題 B：複数発言からの判断

Aでは、2022年度は4つのイラストを時系列に並べ替えるという施行調査テストで出題されていた問題が出題されたが、2023年度は説明を聞き取りグラフの4つの項目を決定する問題に戻った。例年通り表の空所を埋める問題も出題されている。「選択肢は2回以上使ってもかまいません」という指示文通り、2022年度と同様に複数回使う選択肢があった。Bは、例年通り4人の説明を聞き取り、示された条件に最も合うものを選ぶ問題。全体の正答率は7割を超えていた。

### 第5問 講義

例年通り、講義を聞いてワークシートを完成させる問題、講義の内容一致問題、グラフつきの内容一致問題が出題されている。全体の正答率は「幸福感」を扱った2021年度が6割近かったのに対して、gig workを扱った2022年度は4割にも満たなかったが、アジアゾウを扱った2023年度の正答率は5割を超えた。とは言え、第5問は例年通り全体の中で最も正答率が低い問題である(2023年度は55.8%)。

アジアゾウの性格を答える問27は、現役生と高卒生の正答率の差が16.7ポイントで、2023年度に最も大きな差がついた問題だった。該当する部分のスキriptと選択肢は次の通り。

〔スキript〕

Asian elephants are sociable animals that usually live in groups and are known for helping each other. They are also intelligent and have the ability to use tools.

〔選択肢〕

- ① Aggressive and strong
- ② Cooperative and smart
- ③ Friendly and calm
- ④ Independent and intelligent

2023年度大学入学共通テスト 英語 リスニング 第5問

正解は②。高卒生の正答率が8割を超えたのに対して、現役生の正答率は6割強であった。cooperativeもsmartもスキriptの中で直接使われている単語ではな

く、ここで取り上げたスキriptの第1文をまとめてcooperativeを導き、第2文をまとめてsmartを導かなければならない。このような言い換えがうまくできないと、直接聞こえた言葉であるintelligentを含む④を選ぶことになりかねないが、実際に現役生の4人に1人は④をマークしていた。

また、ペア採点となる[30]、[31]は全体の正答率が36.9%で、2023年度の問題の中では最も低い正答率だった。スキript、ワークシート、選択肢の該当部分は次の通り。

〔スキript〕

As a result, there is less contact between elephant groups and their numbers are declining. Also, many elephants are forced to live close to humans, resulting in deadly incidents for both humans and elephants.

〔ワークシート〕

◇ Threats to Elephants

Threat 2 :

a decrease in elephant [30] interaction

an increase in human and elephant [31]

〔選択肢〕

- ① clothing      ② cosmetics      ③ deaths
- ④ friendship    ⑤ group            ⑥ performances

2023年度大学入学共通テスト 英語 リスニング 第5問

[30]は⑤、[31]は③が正解であるが、[31]の正答率が特に低い。これは先に挙げた問27のように文内容全体から意味を把握するのではない。前後に関連する説明のない状態で、スキript中のdeadly incidentsの聞き取りそのものが問われている。もっとも、ワークシートにThreats to Elephantsとあることからある程度までは内容を推測すべきだと思うが、threatsとは対極にあるように思われる④を選んだ受験生が全体の4割近くいたことは驚きである。個々の音の聞き取りの重要性が感じられる問題であった。また、最後の問33も全体の正答率は4割に達していない。

### 第6問

A：対話文内容一致 B：対話文内容一致とグラフ選択

A、Bともに2022年度と同様の出題。Aでは、ハイキングに関する2人の会話を聞き、それぞれの発話者の発言の要旨に関する内容一致問題が出題されている。正答率はいずれも6割を超えている。Bでは、就職後に住む場所に関する4人の会話を聞き、街の中心部に住むかどうかを判断する問題(問36)と、Lisaの発言を表してい

る図表を選ぶ問題（問37）が出題されている。4人の会話の音声を頼りに発言を聞き分ける問36の正答率は、2021年度は1割程度であったが、2022年度には6割近くに上がったのに対して、2023年度は4割前半になっている。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

本文の英語がそのまま解答になるわけではなく、1か所だけから解答が決まるわけではない問題が少なからず出題される点は、リーディング、リスニングに共通した特徴である。リーディングの問題のほうが、読み直しができる分、解答しづらい問題となっている点は異なるが、実質的な違いはほとんどない。その意味では、リーディングの問題をリーディングの問題として扱った後、本文を音声化して、リスニング問題として活用する、といった方法も考えられる。リーディング問題の英文は分量が多いが、一度リーディング問題として扱った後であれば、リスニング対策として有効なのではないかと思う。

## 2

## 国公立二次試験

### (1) 概要

2023年度の主要な国公立大入試で出題形式や内容について目についたものを取り上げる。

**東京大**：毎年のように出題形式に細かい変化が見られるが、2023年度は出題形式に大きな変化はなく、2022年度同様に、3つのリスニング問題はばらばらのテーマで出題され、4(A)は誤文指摘問題の出題だった。河合塾の分析によれば、設問ごとに出来不出来の差が大きく、1(B)(イ)、5(A)の出来が特に低く、1(B)(イ)は2割程度、5(A)は1割にも満たない正答率であった。これらはいずれも語句整序問題であった。また、4(A)の誤文指摘問題も出来は芳しくなく、5問中で最も正答率の高いものでも5割に届いていない。東京大受験生であっても、文法問題に弱いことが感じられる。

**京都大**：2014年度以来初めて、読解問題の設問がすべて下線部和訳問題に戻った。2020年度には読解問題の設問5つのうち下線部和訳問題が1問だけになり、京都大の読解問題からいよいよ和訳問題が姿を消すのかと感じられましたが、むしろ方向性としては逆で、2021年度は6つの設問のうち5つが下線部和訳問題、2022年度は6つの設問のうち4つが下線部和訳問題、という構成となっていた。京都大は素材となる英文の

理解度を測るのに最も適切な問題となるように柔軟に設問を作っているのであろう。Ⅲの和文英訳では、2017年度の「生兵法は大怪我のもと」、2021年度の「転ばぬ先の杖」に続いて、「情けは人のためならず」ということわざを扱った問題が出題された。日本文として読めば普通に入ってくる内容だが、いざ1つの英語のパッセージにまとめようとする、第1文で述べられていることと最終文で述べられていることが不整合であるために、どのように書いても不自然な英語の文章になってしまう。このあたりの処理を京都大はどのように採点しているのか気になるところである。Ⅳの自由英作文は、2021年度の形式に似た語数指定つきの対話文の空所補充問題が出題された。(4)の直後の発言から、(4)には複数の理由を述べるのが求められているが、再現答案を見るとこの条件を満たしている答案は皆無であった。

**北海道**：2022年度から出題形式に変化はない。読解問題では例年通り現代的なテーマの英文が用いられている。2023年度は長文中の記述問題は4つの下線部和訳問題だけとなった。また、空所補充問題で前後の文だけでなく、パラグラフ全体の内容を考慮しなければならない問題が出題された。北海道大の特徴的な出題である③の読解問題と自由英作文の融合問題、④の会話文の要約問題も引き続き出題されている。

**東北大**：2022年度同様に下線部和訳と日本語による内容説明問題が出題の中心。従来、普遍的なテーマの英文が出題されることが多かったが、2022年度に「環境難民」という時事的な問題を扱った英文が出題され、2023年度はさらにその傾向が強まって、「人間の脳とAIの違い」「男性の美に関する考え方の多様化」といった英文が出題された。Ⅳの英作文の問題は2022年度同様に、語句整序、和文英訳、日本文の意味を表す英文の選択という問題が出題された。問題文の日本語は1ページにわたる長文であった。

**一橋大**：2022年度と同様の出題形式で、1,500語を超える長文読解問題、自由英作文、リスニングが出題されている。2022年度と同様に3つの画像から1つを選んでその内容を描写する形式の問題が出題された。何を書けばいいのかわかりづらいものも出題されている。なお、2025年度から二次試験のリスニングが廃止されることが発表されている。

**名古屋大**：2022年度はⅠ(読解問題)とⅢ(対話文問題)に和文英訳が出題されたが、2023年度はⅠのみでの出題となった。Ⅲの対話文問題に含まれる自由英作文

は2022年度から語数が増え15~20語になり、Ⅳの自由英作文は献血に関する2つのグラフを読み取り、30~50語の英文を書く問題が2問出題された。

大阪大：いろいろな大学で出題形式が変わる中、際立った変化のまったくない出題が続いている。2023年度も同様であった。年々読解問題が取り組みやすくなっているが、2023年度も同様に解答しやすい問題が出題されている。〔I〕で2題出題される下線部和訳問題は、比較的難度の高いものが出題されてきたが、2023年度の〔I〕Aは高1レベルでも解答できるのではないか、と思われるようなものになっていた。なお、外国語学部は、〔II〕の長文読解問題と〔IV〕の和文英訳問題で独自の出題がなされている。〔II〕では指定語数内にまとめるのにかなり苦勞する問題（設問(2)）や、文全体の内容理解がいい加減であると対処できないような和訳問題（設問(6)）も出題された。また、〔IV〕の和文英訳問題も、例年通り、直訳の効かない日本語が出題されていた。

広島大：2021年度から、段落ごとに100語で要約するという独特な要約問題が出題されているが、2023年度も同様の出題。ただし、段落数が1つ減ったために書くべき語数が100減った。3の自由英作文では「オンラインサービスを普及させる方法」について100語の論述が求められ、4の自由英作文の問題では2022年度まではグラフが1つであったが、2023年度は「日本人留学生の数と目的地」に関する円グラフ2つ、折れ線グラフ1つが出題された。

九州大：ここ数年毎年出題形式が変わってきたが、2023年度は2022年度と同様の出題形式であった。読解総合問題が3題、自由英作文問題（論述・図表説明）が2題出題され、配点も3対2である。図表説明問題では、語数ではなく文の数が指定されるという珍しい出題になっていた。

その他の大学では、小樽商科大、金沢大では解答用紙には英語以外書くことのない出題が続いている。名古屋工業大では、合教科・合科目的な問題として、数学と英語の合教科を意識した出題が続いているが、2022年度同様に静岡大の情報学部情報学科でも同様の問題が出題された。また、神戸大では、2022年度に復活した小説文が続けて出題されている。なお、神戸大では2022年度と同様に、出題の一部に誤りがあり、受験者全員の解答を正解とする旨の発表があった。

国公立、私立を問わず、2023年度はコロナ禍、ジェンダーの平等、地球温暖化、AIなど時事的な事柄を扱っ

た英文が多く見られた（後述のように古典的な素材からの出題も見られる）。一方、時事的な内容の英文をまったくと言っていいほど出題しない大学もあった。

## (2) 読解問題

例年、読解問題として下線部和訳の問題に触れてきたが、今回は先に触れた静岡大の合科目的な問題を取り上げる。

問：上記の英文から得られる情報を整理したものを記述しなさい。その上で、下線部の答えを導く方法について日本語で論理的に説明しなさい。ただし、数式や図を用いてもよい。また次の条件を考慮すること。

（条件は省略）

静岡大

「上記の英文」とは100語程度のもので、Smith, Brown, Jonesの3人によるドッジボールが行われること、それぞれの命中率は100%, 80%, 50%ということが述べられている。英文そのものは非常に簡単で、解答も日本語で書くように求められている。2022年度の早稲田大の政治経済学部の問題ほどではないにせよ、英語の問題として成立しているのかどうか、やや疑問の残る出題であった。

## (3) 表現問題

全体的に見て、2023年度も長文読解や対話文問題に自由英作文を組み込んだ融合問題が増えている印象である。従来型の和文英訳問題よりも自由英作文の問題の出題のほうが多くなっている。出題内容としては、「社会的出来事についての説明や意見を書くもの」「個人に関する事柄・体験などを書くもの」「与えられたテーマについて書くもの」があり、最後のタイプの出題が最も多い。例年本稿で書いているように、現役受験生を高2、高3と見てきた印象では、彼らは自由英作文の問題に対しては以前の受験生のような抵抗を感じることなく取り組むが、以前の受験生と比べると英語表現の力そのものは低下していて、和文英訳問題に苦戦する、という印象である。和文英訳は自由英作文で正しい英文を書くための前提と言えるので、従来型の和文英訳の練習も不可欠であろう。

私大の出題形式は大学や学部で千差万別であるが、読解問題では、空所補充、下線部の言い換え、内容一致などが出題の中心である。また、慶應義塾大、早稲田大などを中心に一部の難度の高い大学で、主に「読む・書く」を中心とした技能統合問題が出題されている。空所補充や言い換え問題では、単語や熟語等の語彙的知識をそのまま問う場合と、文意を把握したうえで未知の（あるいは難解な）語句の意味を推測する必要がある場合とがあるので、基本的な語彙力と英文内容の理解力を高めておく必要があるという点では、国公立大の場合と違いはない。国公立、私立を問わず、読解問題の長文化が進んでいるが、客観問題の出題が多い私大の問題は、1題の英文量が多いだけでなく問題数が多いのも特徴で、限られた時間内で設問に答えるトレーニングが絶対に不可欠である。また、ある意味でトリッキーでパズル的な、言いようによっては運に左右されるような問題が出題されることもある。いずれにしても、大学間で出題形式に大きな差がある。安易に過去問中心の学習を進めることはできないが、ある程度基礎的な力を身につけたら、過去問演習を中心に学習を進めるべきであろう。ただし、過去問がもう一度出題される可能性はないと言っているので、その大学の出題傾向に似た他大学の過去問、特に難度の高い大学の読解問題対策としては、過去問に出典として挙げられている出版物なり、ウェブページなりにあたってみるのもいいかもしれない。2023年度に特に目についた問題をいくつか取り上げておく。本格的な記述問題が30年以上出題されていなかった慶應義塾大の理工学部では、日本語による要約問題と和文英訳問題が出題された。早稲田大の法学部では図表の説明やwebページ、メールの完成問題など、実用的な場面を意識した新傾向の問題が出題された。年々長文化の傾向が著しい教育学部では2023年度もその傾向が続き、特にⅡは1,756語で、合計も3,551語になっている。国際教養学部でJohn Stuart Millの「自由論」(1859年)が出題された。古典的な出典と言えば、国公立大であるが、和歌山県立医科大でSomerset Maughamの「月と6ペンス」(1919年)が出題された。2021年度の京都大でもDarwinの「種の起源」(1859年)に対する同時代の研究者の英文が出題されており、古典的な英文が好んで出題されるようになってきているような感がある。最後に、2021年度から総合問題の一部として英語が出題されている早稲田大の政経学部の問題について触れておきたい。2022年度

は、本文の理解とは無関係な「ベンフォードの法則」に関する問題が出題されていた。日本文による説明を読んで、この法則を理解しこれを適応する問題で、累乗の計算が前提となっていたのに対して、2023年度の問題は本文の理解と結びついたものであり、用いるべき計算方法についても詳しい解説が述べられており、受験生にとっては対処しやすくなっていた。

### 江本 祐一（えもと・ゆういち）

河合塾で京大、医進の授業を中心に担当。京大系のテキスト、京大オープン（第2回チーフ）、及び高1から高3までの最上位テキストの作成に携わる。出版物は「英語暗唱文ターゲット450」（旺文社）、「入試英単語の王道」（河合出版・共著）など。



—— 知が啓く。 ——

啓林館

URL <https://www.shinko-keirin.co.jp/>

令和6教 内容解説資料

本 社	〒 543-0052	大阪市天王寺区大道4丁目3番25号	電話 (06)6779-1531	FAX(06)6779-5011
東京支社	〒 112-0013	東京都文京区音羽2丁目10番2号日本生命音羽ビル4階	電話 (03)3814-2151	FAX(03)3814-2159
北海道支社	〒 060-0062	札幌市中央区南二条西9丁目1番2号サンケン札幌ビル1階	電話 (011)271-2022	FAX(011)271-2023
東海支社	〒 460-0002	名古屋市中区丸の内1丁目15番20号ie丸の内ビルディング1階	電話 (052)231-0125	FAX(052)231-0055
広島支社	〒 732-0052	広島市東区光町1丁目7番11号広島CDビル5階	電話 (082)261-7246	FAX(082)261-5400
九州支社	〒 810-0022	福岡市中央区薬院1丁目5番6号ハイヒルズビル5階	電話 (092)725-6677	FAX(092)725-6680